

**初級学習者対象の制限作文と日本語設計図を用いた
パラグラフ・ライティング指導研究及びライティング教材の研究**

第 44 回英米文化学会大会 2026 年 9 月 5 日

四日市大学 樋口晶子

I 研究背景と先行研究

1. 日本の若者が自分の考えを書いて伝える力の低さ

文部科学省(2026)の全国学力・学習状況調査では、自分の考えを書く際に、考えと根拠を区別したり、理由を明確にしたりすることに課題が示されている。母語であっても自分の考えを論理的に書いて伝える力に課題がある学習者が、その課題を抱えたまま大学に進学することも考えられる。日本の大学生が英語ライティング活動を行う際の問題点として、文章構成がわからず、「パラグラフ」という意識を持たずに英文を羅列する例や、日本語で作文を書く経験の不足から、何をどのように書くかを決められない例が報告されている(馬場, 2021)。また、子供と違って書きたい内容と英語力との差が大きく、英語で書くことに気持ちが向かないことも指摘されている(樋口, 2024)。

2. 英語で書く活動の難しさ

書き手の意志を表現・伝達するライティング活動では、複雑な思考活動が必要である。Pincas (1982) は、一定の文法力と語彙力を有する英語学習者であっても、Composition (構成)、Communication (伝達)、Style (スタイル) の各領域で、話題・内容・構成・表現等を同時に、選択・決定する必要があることを示している。

コミュニケーション能力の育成に重点を置く CLT (Communicative Language Teaching) におけるライティング活動の目標が自分の意見を伝える自由作文であるとすれば、英語力が十分でない初級学習者にとっては負担の大きい作業である。その負担の大きさから、最初から書くことに気持ちが向かない例も多く見受けられる。従って、初級レベルの大学生に対するパラグラフ・ライティング指導では、これらの負担を軽減するために、パラグラフの構成(どう書くか: how to write)、特定の話題の選択(何を書くか: what to write)についての負担を減らすことなどが考えられる。ほかにもライティング指導の注意点として、作文量を段階的に拡大し書く作業に加えられる統制・制限を少しずつ緩めること(沖原, 1991)、伝達内容を重視した読み手視点のフィードバック(Johnson, 1981)などが挙げられている。

以上の課題を踏まえ、以下の問いを設定する。

RQ1 「どう書くか(how to write)」「何を書くか(what to write)」の負担を減らすことで、初級レベルの大学生が自分の意見をまとめて英語で書くことに対する気持ちが楽になり、書いて伝えようとする意欲を引き出すことができるのか。

RQ2 どのような手法を用いれば、「どう書くか」「何を書くか」の負担を減らすことができるのか。

II 研究の概要

1. 研究の目的・仮説

本研究は、パラグラフ構成の明示的教授と制限作文「英問英答」を取り入れた CLT ライティング授業を行い、初級レベルの大学生が英語で書くことに対する意欲を引き出すことへの有効性を検討するものである。研究調査は 2 段階(調査 1、調査 2)で行い、調査 2 では、統語構造(語順)の明示的教授を加えた。

【仮説】3 つの手法(1. パラグラフ構造の明示的教授、2. 制限作文「英問英答」の導入、3. 統語構造(語順)の明示的教授)を用いた CLT に基づくパラグラフ・ライティング授業により、初級学習者が英語で伝えようとする意欲を引き出すことができる。

研究は予備調査(2022 年度)を経て、調査 1(2023 年度～25 年度)、調査 2(2026 年度前期)の 2 段階で行った。2022 年度の結果については樋口(2024)、2023 年度の結果については樋口(2026)で報告した。本発表では、2023～25 年度の 3 年間で見られた傾向を分析すると共に、2026 年度に実施した調査について過去 3 年間と比較する。

2. 研究概要

(1) 使用した手法

- ・予備調査(2022年度後期) : パラグラフ構成の明示的教授、制限作文「英問英答」(以下「Q&A」)
- ・調査1(2023~25年度) : パラグラフ構成の明示的教授、Q&A、「日本語設計図」
- ・調査2(2026年度前期) : パラグラフ構成の明示的教授、Q&A、「日本語設計図」、統語構造(語順)の明示的教授と、その練習問題

(2) 研究協力者

- ・研究協力者: 英語を専攻としない初級レベルの日本人大学生(1・2年生)
- ・研究協力者数: 予備調査・・・28名、調査1・・・91名、調査2・・・53名、総計172名

(3) 授業の回数と実施者

- ・授業: 各年度4セット(前・後期各2セット)(予備調査は1セット、調査2は2セット)
1セットは4回(1回30~40分)
- ・授業実施者: 発表者

3. 授業の展開

(1) 調査1

- ・前期: ①自由作文(授業前)→②パラグラフ構造の指導→③Q&Aを用いた作文→④自由作文(授業後)
- ・後期: 「前期」授業の②③④に「日本語設計図」の指導を加える。

(2) 調査2

調査1の内容に、田地野(2011)を参考にした語順の指導(意味順)を、毎回の授業に加えた。

4. 指導の内容(独自教材を作成してセットごとに冊子化したものを学習者に配付)

- ・辞書の引き方
- ・パラグラフ構造の教授
- ・Q&A
- ・日本語設計図(独自に考案)
- ・語順の指導(調査2のみ)

5. 分析方法

(作文総語数)

- ・授業の各セット前後における作文総語数(8回/年)を年度別に比較。対象者は各セット前後の提出者。
- ・全回(8回)提出した学生の、初めと年度終わりの作文総語数を年度別に比較。
- ・検定は、ウィルコクソンの符号順位検定(両側検定)及び一元配置分散分析を使用。有意水準を5%とした。

(質問紙調査)

- ・質問内容は、大谷・ミューリ(2021)、松崎(2021)、古谷・桜井(2014)などを参考に、発表者が作成した。
- ・Microsoft Formsによる質問紙調査を毎学期前後に実施(匿名)。回答方式は選択式と記述式の両方を含む。
- ・自由記述については精読した上で、KH Coderを用いた対応分析および共起ネットワーク分析を実施。
- ・選択式回答の分析に、Pearsonの積率相関係数を使用した。有意水準を5%とした。

(インタビュー調査)

- ・4セットの授業終了後(翌年度)に対面・半構造化インタビューを実施した(各年度5~9名)。

Ⅲ 結果

1. 調査1(2023~2025年度)

(1) 質問紙調査

年度ごとに4回(各学期の前後)実施した質問紙調査で、英語および英語ライティングに対する学生の意識の把握とその変化を検討した。4段階評価(とても思う:4、そう思う:3、あまり思わない:2、思わない:1)で、平均値を取った。「英語は好きか:1.5~2.4」とあまり肯定的ではないものの、やや上昇した。一方、「英語は多少間違っても意味が分かればよいか:3.2~3.8」と高い数値を示し、コミュニケーション能力を重視する意識は浸透していることが明らかとなった。また「英語で書けるようになりたい」という気持ちが高い時点では、「英語で書く練習をしたい」という気持ちも高い傾向が見られた($r=.71, p=.01$)。しかし、「書けるようになりたい」と「努力すれば書けるようになる」とでは有意な相関がみられなかった($r=.188, p=.558$)。「英語の知識があれば書ける:2.97~3.54」で終始高く、また年度末に向けて上昇傾向が見られた。

(2) 質問紙調査とインタビュー調査

上述の4段階評価で、平均値を取った。「英問英答(Q&A形式)はわかりやすい:3.12以上」、「パラグラフの作り方がわかった:3.09以上」、「パラグラフを書くことに気分が楽になった:2.65以上」、「日本語設計図は役に立った:3.00以上」という結果が得られた。

インタビュー調査からは、「理解できたという自覚」と「繰り返したことによる自信」が示された。一方、「そう思わない」とした回答では、「英語だからわからない」「英語が難しい」といった、英語そのものに対する苦手意識や困難であると感じる傾向が見られた。

(3) 作文総語数

授業前後の平均総語数は、2023年度44.9語→78.7語(+33.8語)、2024年度44.6語→84.9語(+40.3語)、2025年度49.4語→81.6語(+32.2語)となった。中央値でも2023年度40語→76.5語(+36.5語)、2024年度37語→84.5語(+47.5語)、2025年度40語→60語(+20語)と増加した。

ウィルコクソンの符号順位検定では、前期2回・後期2回の計12回の比較のうち7回で有意差が認められた。また、全提出者を対象とした分析では12回中8回で有意差が認められた。

2. 調査2(2026年度前期)

(1) 質問紙調査

上記と同様に4段階評価の平均を取った。学期末の調査では、「Q&Aはわかりやすい:3.28」、「パラグラフの書き方がわかった:2.93」、「パラグラフを書くことが気が楽になった:2.78」、「語順の練習は良かった:3.50」などの結果が得られた。

(2) インタビュー調査・自由記述

語順指導についての評価は高く、記述欄では、反復によって整理・復習・定着ができること、文法や文の構成がわかりやすくなったことなどが肯定的理由として挙げられた。一方、パラグラフの書き方がわかったかについては、過去3年度とほぼ同様の結果が得られたが、肯定的な意見がある一方、「英語を学ぶのがしんどい」「未だに英語は苦手」「いざ書くとすると難しい」といった英語そのものに対する苦手意識が残った。

(3) 作文総語数

2026年度前期の学期初めと終わりの作文総語数を、過去3年間の同時期と比較した。2026年前期は平均値41.4語→60.8語、中央値36.5→61.5語で($W=42.5, r=-.79, p<.001$)と増加しており、有意差が認められた。しかし、年度別の変化量の比較では、年度による有意差は認められなかった($F(3, 92) = 1.244, p = .298$)。

IV まとめと課題

(1) まとめ

調査1(2023~25年度)では、パラグラフ構造の指導と制限作文「英問英答」を取り入れたCLT授業を受けた後、パラグラフを書くことに対して気分が楽になり、作文の総語数が増加した。質問紙調査・インタビュー調査からは、「理

解できた(わかった)という自覚」と「繰り返した」ことが強調された。Q&A や日本語設計図が学習者の作文を支える手法として肯定的に受け止められた。

これを踏まえて行った調査 2 (2026 年度前期) では、パラグラフ構造の指導と制限作文「英問英答」に加え、統語構造(語順)の指導と毎回の練習を取り入れた。学習者は「文法(語順)」について「わかってきた」と感じ、語順の練習も高く評価した。一方、パラグラフを書くことへの心理的負担や英語・文を書くことへの苦手意識は残った。総語数の変化量の比較では、過去 3 年間との有意差は認められなかった。

初級学習者に対して、作文の「内容」と「形式」を段階的に支援することは、英語で書くための負担軽減につながる可能性がある。また制限作文(Q&A)、日本語設計図の明示的指導は、初級学習者がパラグラフを書く際の手法として肯定的に受け止められた。語順指導も学習者から肯定的に受け止められたが、語順の理解が進んでも、英語で自分の意見を書くことへの苦手意識が直ちに解消されるとは限らない。

(2) 課題

英語でパラグラフを書くことに対する気持ちが楽になったとしても、一定の学生が英語に対する苦手意識を持ち続ける。ライティング授業を通してどのように軽減するか、そのために教材に取り入れる内容の精査が今後の課題である。加えて、指導期間を延長した場合の効果、学習者の英語力・語彙力等と総語数の関係、作文内容や正確さの変化についても検討する必要がある。

参考文献

馬場千秋(2020)。「英語を不得意な学習者対象のライティング指導の第一歩」『ELEC 通信』。

https://www.elec.or.jp/teacher/communication/criticism/baba_ronko.html

Byrne, D. (1979). *Teaching writing skills*. Longman.

Finocchiaro, M., & Brumfit, C. (1983). *The functional-notional approach: from theory to practice*. Oxford University Press.

古谷聡・櫻井千佳子(2014)。「英語に関する大学生の意識調査と英語コミュニケーション能力育成についての一考察」『The Basis: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』, 4, 29-50.

樋口晶子(2024)。「CLTに基づく『英問英答』を用いた日本人初級学習者に対するパラグラフ・ライティング指導の有効性」『JACET 授業学ジャーナル』4, 56-74.

https://www.jacetsigdevelopmentaleducation.net/_files/ugd/dcd170_64020f7ea1b1494991b369bf16517168.pdf

樋口晶子(2026)。「CLTに基づく『英問英答』と『日本語設計図』を用いた日本人初級学習者に対するパラグラフ・ライティング指導の有効性」『英米文化』56, 1-22. https://doi.org/10.20802/eibeibunka.56.0_1

Johnson, K. (1981). "Writing", 93-107, Johnson, K. & Morrow, K. (Ed.), *Communication in the classroom: applications and methods for communicative approach*, Longman.

松崎久美(2021)。「大学生初年次の英語に関する意識調査—名古屋芸術大学における全学共通科目『英語 1』受講生に対するアンケートより—」『名古屋芸術大学研究紀要』, 42, 319-327.

文部科学省・国立教育政策研究所(2026)『令和 8 年度全国学力・学習状況調査の結果公表①のポイント』。

https://www.nier.go.jp/26chousakekkahoukoku/factsheet/data/26kekkakouhyou_1_point.pdf

沖原勝昭(1991)。「ライティングの原理」垣田直巳(監修)・沖原勝昭(編)『英語のライティング』大修館書店, 1-42.

大谷杏・ミュリ真貴子(2021)。「大学生の英語授業と英語学習に関する意識調査」『福知山公立大学研究紀要』5 (1), 75-87.

Pincas, A. (1982). *Teaching English writing*. Macmillan Press.

田地野彰(2011)『<意味順>英作文のすすめ』岩波書店。

*本研究は、JSPS 科研費 25K04159 の助成を受けています。